

HARVEYROAD WEEKLY

2008・06・16 585号

四川大地震 救援隊がもたらした対日感情の変化

財部誠一 今週のひとりごと

今週はサンプルの農業特集第2弾の取材で新潟、千葉と素晴らしい生産者にお目にかかってきました。取材は常に新しい発見に満ちており、楽しくて仕方ないのですが、このところややオーバーペース。どこかで調整したいなという気持ちもありつつ、明日からは米国取材です。

4泊6日でホノルルからロスをめぐる予定です。個別企業の取材であり、時間もタイトですが、せつかくロスに行くわけですから、サブプライムローンにゆれる米国経済の一端を垣間見てこようと思っています。

今週のBS日テレ『財部経済研究所』は、竹中平蔵元大臣を特集しています。竹中さんを好きな方も、嫌いな方も、一見の価値あります。

(財部誠一)

※HARVEYROADWEEKLYは転載・転送はご遠慮いただいております。

中国に生まれた歴史的な一体感

中国人の「心」の変化は、先週お伝えした「労働意識」だけではありません。中国をよく知る者にとっては、それいじょうに大きな変化がありました。それは四川大地震をめぐって湧き上がった国民の一体感です。死者が7万人を数えるという甚大な被害がもたらされたのだから当たり前だろうなどと思っはけません。中国を知る者からみると、13億の民が一体感を共有することなど想像を絶する事態でした。

そもそも中国はあまりにも巨大で、国家としての体をなしていないという認識から出発しなければなりません。財務省で長く主税畑を歩み、税関局長を最後に退任した元官僚が、かつて私に興味深い話をしていました。

「古今東西、あらゆる国家はその成立後にまっさきにやったことは徴税だ。つまり徴税こそが国家の証なのです。ところが中国はあまりにも大きすぎて、国が国税を徴収することができない。各地方に徴税を委託しているというありさま。税の論理でいえば、国家としての体をなしていません」

税の論理は国家構造を透視します。中国は分権国家以外のなにものでもありません。言語ひとつとっても7大方言あるいは10大方言という分類もありますが、言語学者によっては細かく分類すれば1000を超える言語が中国には存在するといいます。方言といっても日本の方言とは意味が違います。マンダリンと呼ばれる標準語はありますが、出身地域が違ったら、話しがまるで通じないことなど日常茶飯事です。4年前、サンプルの特集で上海のコマツを取材したときにも、こんなことがありました。コマツの建機を購入し、上海郊外で公共事業を受注している元農民にインタビューすることになりました。コマツの上海事務所は、元農民がどんな発言をするかわからないというリスクもあるため、通訳はコマツの社員にさせてくれということになりました。北京大学出身のエリートで、なおかつ上海勤務も5年を越え、上海語も堪能だということでした。コマツの中国人スタッフが中国語(マンダリン)に訳します。そして、元農民の若者がボソボソと語り始めました。

◆四川大地震

震源地：中華人民共和国中西部
四川省アバ・チベット族チャン族自治州
ブン川県映秀鎮(全人口1万人の約8割が死亡、行方不明)
地震発生時間：現地時間2008年5月12日
14時28分
震源の深さ：19km
規模：マグニチュード7.9～8.0
最大震度：メルカリ震度階級IX
ブン川県 映秀鎮(震度6弱相当)
断層の長さ：約280キロ
地震の種類：直下型、逆断層型
最大余震：2008年5月13日15:07 M6.12
呼称：「ぶんせん地震、ウエンチュアン地震、wenchuan dizhen」と呼ぶ。
「四川ブン川 8.0級地震」。
中国国内の報道などでは、「512 大地震」。

◆四川大地震の被害

死者：6万9130人
負傷者：37万4031人
行方不明者：1万7824人
家屋の倒壊：21万6千棟
損壊家屋：415万棟
避難した人：1514万7400人
被災者累計：4616万0865人
(中国民生部 6月6日発表)

◆援助隊の派遣までの動き

福田首相は地震直後、大地震を受けて見舞いのメッセージを送る。政府はできるだけ支援を行う用意があると表明。13日夜、中国政府は「要員の派遣は当面必要ない」と返答。日本の民間団体の支援にも「外国からの支援は受け付けていない」と返答。その後、生存率が低下する地震発生から72時間経過後の15日、日本の救援チームの受け入れを表明。

その時です。コマツの中国人スタッフが突然、カメラを制止したのです。

「申し訳ありません。(元農民の若者が)何を言っているのかまったくわかりません」

これが中国の現実なのです。中国人どうしてコミュニケーションができないことなどごく普通のことです。冷静に考えれば当たり前のことでしょう。EUの人口は5億人。先進国全体で8億人。そして中国は13億人。単一の国家として成り立つ限界をはるかに超えた国なのです。言語も違えば、民族も違う。

ですから北京オリンピックの受け止め方にも北京と上海とでは温度差があります。いうまでもなく北京はオリンピック色ですが、上海には「北京ほどの熱気はない」と言われていましたが、実際に上海市内をめぐってみると驚くほどオリンピック色がありません。それどころか上海では2010年開催の万博への関心の方が高いのではないかという印象すらあります。

対日感情の劇的変化を日本はどういさせるのか

そんな分権国家“中国”を覚醒させた四川大地震。そのなかでさらに驚くべき事態が起こりました。対日感情の劇的な転換です。

「中国と日本が心を通じあえる初めてのチャンス。これを逃したら本当の日中友好は永遠にやっこない」

私が上海を訪れる2日前の6月6日に、四川省青川の取材からもどってきた金曉慶氏の言葉です。彼は私のサンプロの中国特集のすべてにコーディネーター兼通訳として関わってくれた人物で、私がもっとも信頼する中国人です。彼はいま、四川大地震で生まれた中国人の対日感情の変化を一時的なものではなく、日中の本当の信頼関係にまで昇華させたいという強い思いを抱いて四川省の被災地からもどってきました。

日本の緊急救援隊は派遣が遅れたこともあり、中国人被災者を生きて救出することができませんでしたが、亡くなった被災者の左右に整列した隊員たちが黙祷を捧げる姿は多くの中国人の胸をうち、ネット上には「謝謝」の嵐が吹き荒れたことは、すでに日本国内でも多々、報じられました。しかし、なぜ、そこまで中国人の人々が日本の救援隊に感謝し、根深い反日感情が突如として親日へと変化したのか。その理由については明らかにされていません。

しかし救援隊が捜索活動を行った四川省青川県喬荘鎮のビル倒壊現場まで取材に行った金曉慶氏の解説で、得心がきました。

「もちろん中国の軍人達も必死に捜索しました。しかし中国人の常識では生存者がいる可能性がないとなれば、重機で瓦礫を取り除き、遺体は2人がかりでぼんぼん投げられていく。ところが日本の救援隊がとった行動はまったく違っていました」

日本の救援隊が捜索活動を行ったビル倒壊現場は危険きわまりない場所でした。瓦礫の山に隣接するビルはいつ崩れ落ちて仕方のない状態だったそうです。瓦礫を取り除く際、日本の救援隊も重機を使いました。ところが人の気配を感じ取るや、隊員たちは重機の作業を即座に止め、瓦礫を手で払いのけたそうです。その作業を見つめていた被災者たちは、隣接する倒壊寸前のビルのことなどまるで気かけず、一心不乱に救出活動する日本の隊員たちの姿に心を打たれたそうです。

救援隊員たちが最初に救出したのは赤ちゃんをしっかりと抱いたまま亡くなった若い母親でした。その亡き骸を丁寧に遺体袋に入れた隊員たちは、その左右に整列し、心からの黙祷を捧げました。その一枚の写真が中国全土を駆け巡ったのです。日本の報道番組でも繰り返し、その写真が映し出されました。

「中国人はなぜあの写真に感動したのか。それは救援隊員があらわした死者に対する尊厳の気持ちだったのです。日本人が中国人の死者に対して、あれほど深い哀悼の気持ちを見せてくれたことに中国人は驚き、そして感動したのです」

中国では旧日本軍が中国人を惨殺するシーンをこれでもかといわんばかりに流すテレビの連続ドラマがいまだに放映されています。胡錦濤主席の訪日を機に、北京は日中友好へと大きく舵を切ったはずなのに、中国の連続ドラマはあいも変わらず反日感情を煽り続けているのです。にもかかわらず、中国人の対日感情は一変したと金氏は言います。

「旧日本軍といまの日本人は違う。多くの中国人はそう考えるようになりました。ネット上でも『日本人の偽善に騙されるな』といった書き込みがあると、一気につぶされてしまうという状況すら生まれています」

しかし日本のメディアはこうした状況をまるで理解しようとしません。それどころか、中国政府の対応の遅れや手抜き工事批判など、批判報道ばかりが目立ってはいないでしょうか。金氏とともに青川を取材した中国人のAD(アシスタント・ディレクター)が日本のテレビクルーに激怒したそうです。「中国政府の被災者への対応は遅いと思いますか」という問いかけに対して「遅くはないよ」と答えた中国人はすべて無視。「遅い」と不満を口にした被災者だけを撮影する日本人ディレクターに対して、怒りを爆発させてしまったのです。

中国人が初めて見せた日本人への理解。四川大地震という悲劇がもたらした日中の関係改善のチャンス。それを自らつぶす馬鹿があるだろうか。北京政府にいかなる意図があろうがなかろうが、隣国の国民感情の歴史的な変化に、日本人も真正面から答えるべきではないでしょうか。(財部誠一)

◆国際緊急援助隊の動き

16日：日本の国際緊急援助隊(外務省、警察庁、海上保安庁、東京消防庁、国際協力機構など第一線のメンバー)第1陣31人が、四川省青川県で救助活動を開始。喬荘地区の倒壊した病院職員宿舎に残された乳児を含む3人の救出作業を進める。救助犬3頭を連れた援助隊の第2陣29人も同日夕、成都空港に到着。

17日：第1陣が中国から割り当てられた青川県は道がふさがりなどのトラブル。次に指定された北川チベット自治県岷山地区までは約300キロ走行し、17日は終日移動に費やす。都市型災害への装備を中心としたチームの特徴をまったく生かせず。

18日：岷山地区で生き埋めになった住民の救助を始める。倒壊した「北川第一中学校」と市街地で生存者を捜し13遺体、市街地で1遺体を収容。「もっと早く着たかった」と救助チーム。

19日：政府は救助チームについて、生存者救出可能性が低下したことで帰国を検討。一方、負傷した被災者の治療のため、国際緊急援助隊医療チームを現地に派遣を決定。

20日：医療チーム、四川省入り。

21日：救助チーム帰国。第1陣32人、第2陣29人の計61人で約20遺体を見つける。生存者救出は叶わなかった。援助隊が17日、救助活動中、整列して犠牲者に黙とうをさげられた姿を映した1枚の写真がネットで配信される。中国全土から絶賛の声。反日ムードが一転して好印象に。日本大使館に市民からの感謝の意思が多く寄せられ、成田空港には約30人の在日中国人らが出迎え隊員らの健闘をたたえる。